

チベットにおける「ヤンを呼ぶ」儀礼

長野 禎 子

(平成20年3月31日受理 最終原稿平成20年5月20日受理)

本稿は、チベットの民間信仰の中でチベット文化圏全域に亘って行われている儀礼、「ヤンを呼ぶ」(ヤンゲー) 儀礼を記述分析することを目的とする。この儀礼は、チベット民衆の社会生活の節目で、必ず行われる重要な呪術宗教的儀礼であるが、チベットでの現地調査が困難であったこともあり、全容を知ることが可能な民族誌は皆無に近かった。

著者は、この儀礼に断片的に言及した先行研究を集めるとともに、中国・チベット地域での現地調査を行った。さらに、民間信仰を取り入れて体系化しているボン教の中で、この儀礼がどのように行われるかを参与観察し、儀式書の文献調査をも合わせて行った上、この儀礼の民族誌と、ボン教寺院におけるヤンゲーの儀礼と儀式書の記述を完成させた。この民族誌によって、チベットの民間の重要な儀礼の一つの全貌が浮かび上がると確信する。

キーワード：チベット、ヤンゲー、ボン教、民間儀礼

はじめに

チベット大乘仏教の研究は、現在に至るまで世界的にかなり精緻になされてきた。しかし、チベットの「名もない」宗教(Stein 1993:225)である、民間信仰や民間の宗教儀礼の研究は、中国での現地調査が長年困難であったため、研究対象として取り上げられることはほとんどなく、その実態は現在でも世界的にあまり知られていない。また、これらの民間の「名もない」宗教やその宗教的技術を宗教体系の中に取り込み、チベット独自の宗教として長い年月をかけて体系化してきたボン教の研究もごく最近になってやっと進展の兆しが見え始めたところである。

ここで、取り上げるヤンゲーの儀礼も、民間の宗教儀礼で、しかも、チベット人自身も認めるように、チベット全域において、現在も民衆の生活サイクルの節目で最も頻繁に行われる重要な儀礼である。それにも拘らず、この儀礼がどのような時に、どのように行われるかの全容を把握できるような民族誌は世界的に見て皆無である。著者がここに取り上げた先行研究においても、チベットの民間の通過儀礼の一イベントの中での一儀礼として、断片的に記述されるか、ある地域の民族誌の中でのある特定の社会的節目に行われる一儀礼として言及されるにとどまっていた。

この現状に鑑み、著者は、この論文では、この儀礼の全体的な民族誌的把握を試みた。先行研究に加えて、著者自身のチベットの民間でのこの儀礼の参与観察や聞き取り調査に基づく記述を行い、さらに、この民間の宗教儀礼を取り込み、体系化してきたボン教でのヤングーの儀礼の事例や儀式書の文献の概要の記述をも付加した。この全体を鳥瞰した民族誌的記述は、チベットの「名もない」宗教の中での重要な儀礼、ヤングー儀礼の解明に貢献すると考える。

まず、この論文の1章では、この儀礼が、チベットの各地域で、断片的にはあるが、民間のライフ・サイクルのさまざまな社会的節目でどのように行われるかを記述した先行研究、および、大乘仏教寺院での儀礼を記述した先行研究に触れる。第2章では、著者自身の参与観察や聞き取り調査に立脚した民族誌を提示する。さらに、カトマンズのボン教寺院でのヤングーの儀礼の参与観察と、中国・四川省のボン教の寺、ナンシー寺で入手した儀式書を紹介し、ヤングー儀礼の意味を探る。第3章では、この儀礼の構造的特質についての考察を行なう。

1 先行研究に見る「ヤンを呼ぶ(ヤングー)」儀礼

1.1 民間における「ヤンを呼ぶ」(g-Yang 'gugs又はg-Yang 'bod)¹儀礼

このいわゆる「ヤングー」の儀礼は、チベット文化域に住むチベット人の間では、今なお行われている重要な民間儀礼である。これが行われる社会的な状況は、地域によって多少の差異はあるものの、一貫した共通性を持っている。その主要な社会的状況とは、(1)結婚式、(2)人や家畜が死亡した時、(3)家畜や作物を売却した時、(4)作物の刈り入れ時、又は刈り入れ直後、(5)家の新築や移転時、(6)一年に一回正月の前頃、である。チベットは、広大な地域にまたがり、著者が行ったフィールドワークや聞き取り調査ではカバーできないところもあるので、この儀礼に言及した先行研究も取り上げておく必要がある。そこで、まず、主要な社会的状況に対応して、この儀礼がチベット文化圏の各地域でどのように行われているかに言及した先行研究を順次取り上げていく。

1.1.1 結婚式

1.1.1.1 中央チベットとシッキムでの結婚式の事例

管見によれば、結婚式でのこの儀礼に言及した最も古い論文は、S. C. Das² (1893: 8-33)によるものである。彼によると、中央チベット(ウ・ツァン)地域の結婚式では、花嫁が実家を出るとき、「花嫁を戸口の椅子に座らせて、ボン教の僧侶が秘法の呪文を唱えながらボン教のまわり方に従って右から左へと花嫁の周りを回ってヤングー(「幸運を呼ぶ」invoking good luck)の儀礼を行う。これが済むと、五つの宝石と先端に五色の絹布を飾った小さな矢が―(中略)―花嫁の首筋に固定され、それから―(中略)―花嫁は実家を出立する」(1893: 17)³。さらに、彼は、シッキムの結婚習俗の中では、花婿側でのヤングーの儀礼を次のように記述している。

タシキ・ラマ(村在住のタントラ僧)は、家の神や精霊への供物としてあらかじめ色つきのバターを

塗ったケーキを作っておき、(花嫁がやって来るまさにそのとき) ヤンゲー (invoking of the goddess of luck and fortune) のために小さなテーブルの上に呪的画像を描いて儀礼を行う。他の僧は、家の入り口のドアの背後に経典を持って立ち、花嫁が部屋に入ってくるときにそれで花嫁の頭を触る。—(中略)

— 頭を経典で触る目的は、家に入る花嫁とともに悪霊が入り込むのを防ぐためである (1893:29)。

Dasの以上の記述から、ヤンゲーの儀礼は、花嫁方でも、花婿方でも行われることが推察できるが、それを行う僧は、通常の寺の僧侶ではなく、呪力の強いとされるボン教の僧か村在住のタントラ僧である。彼ら自身によって、儀礼の準備がなされて、行われていたことがわかる。また、Dasは、ヤンを幸運の「女神」として注釈し、その女神を儀礼によって呼び出すことがヤンゲーだとしている。

1.1.1.2 中国雲南省での結婚式の事例

C. Corlinは、中国雲南省北西部のチベット族居住の村、ギャル・タンでのフィールドワークに基づき、チベット人の民家の構造とそのシンボリズムについて論述している (1980:87-92)。その中に、嫁側の結婚式で、儀礼的にも、象徴的にもすこぶる重要な中央の大黒柱のある炉のある台所兼居間で、ヤン・レン (ヤンを受け取るまたは召集する) の儀礼が行われる事がかなり詳細に言及されている。

この柱の象徴的意味であるが、これは家全体が、小宇宙に見立てられ、その中に直立する「宇宙樹」をあらわし、上層の神の住む層、中間の人間の住む領域、地下界の龍の住む領域の三つの世界を繋ぐコミュニケーション・チャネルとみなされている⁴。この柱の周りで花嫁の出立の時に行われる、ヤン・レンの儀礼は、チベットの民間信仰の中心的概念に基づいているとして、論者は重視している。彼は、「ヤン」の概念に関して、「一般的には、幸運、繁栄 (luck, blessing, prosperity) と訳されるが、ギャル・タン地方では①哲学的観念としての幸運のみでなく、②超自然的存在の部類をも包摂する」と注解している (1980:89)。

このヤン・レンの儀礼を行うために、まず、この儀礼を専門とする祭司が招かれる⁵。儀礼用に準備される主要なものは、ヤンの基盤あるいは拠り所 (g-Yang gzhi) とされる4段のひな壇の四角の構造物で、最上段に絹布つきの矢が立てられた容器である⁶。これと矢は家の繁栄を司る龍 (klu) への供物とされる。通常、これらは、家の食料庫に保管され、毎年一度この専門の祭司によって取り出され、その力が更新されるという。

結婚式の嫁側のヤン・レンの儀礼では、ヤンの精霊ら (spirits) が、ジャン・カバ・ホ⁷という場所から呼ばれ、このヤンの基盤の構造物に留まり、また家族の繁栄を守るために家に留まるように祈願される。この儀礼では、ヤンはあたかも人間の中にいるかのように執り行われる。親族の少年がヤンの化身となり、右手に絹布つきの矢を持って、それを円状に振りながら、祭司と問答をする。少年:「私は、ここにいる」僧:「どこから来たのか、馬や鞍はどんなだった」等々。その後、僧は読経を続け、まだ矢を回している少年に「カッコウはどのように歌うか」と聞くと、少年はその鳥の声を真似る。これは「ヤンの鳥が歌う (g-Yang bya skad)」と名づけられた儀式である。

次に「ヤンが出現する (g-Yang chags pa)」という儀式が、家の主、サダー（土地神の一種）とみなされている花嫁の母親をリード役として執り行われる。母親は、ヤンが屋根の煙だし穴を通して家にどのようにして入ったか、ヤンがその基盤にどのように留まっているか、家の穀物倉にどのように移って、世帯のメンバーに富を与えるかを歌う。そして、母親は、絹布つきの矢を中央に立てたヤンの基盤の載った容器を運ぶ男たちの一行を随えて、大黒柱の周りを3回廻る。その時、一行は次のような歌詞を歌う。「ヤンはこの家の中に留まる。この家は大きな四角の家。ヤンは父親の中に留まる。父親はスメル山のよう。ヤンは母親の上に留まる。母親は幸運の湖、マパムのよう」と。儀礼終了後、ヤンの基盤を入れた容器と絹布つきの矢は穀物倉に置かれ、戸が閉められる。ヤンが逃げるからこの戸は3日間開けてはならないとされている（1980：89-90）。

以上のCorlinによる家のシンボリズムと関連付けられた記述から、「自由霊」の様なヤンが、鳥によってかつての王国の地から運ばれ、矢の旋回運動や呪文に呼応して、家のヤンの拠り所の儀礼用ケーキや供物に入り込み、最後に龍の住处でもある穀物倉に移されて、閉じ込められる様子がよく理解できる。また、この記述によって、この儀礼の主役は、家長ではなく、家では境界的存在である母親と親族の少年であることも判明する。

1.1.1.3 インド亡命先での伝統的結婚式

Skorupski & Cech（1984）は、伝統的習俗の保存を意識し始めたインドの亡命先のチベット人の中での伝統的形式による結婚式を取りあげ、そこにおける宗教的側面を重視して次のように書く。

花嫁が実家から花婿の家に向かう道中では、悪魔や邪悪な精霊が邪魔をすると考えられており、花嫁が実家を嫁入りの持参金を持って出立するとき、花嫁の背中に矢がつけられる。—（中略）—それと同時に、着飾った女性が五色の絹布の付いた矢をもって、「幸運を呼び出す」儀礼を行う。これは富の損失、を防ぎ、災難・病気が起こらないようにするためになされる（1984：19）。

ここで重要なのは、花嫁が実家を出立するとき行われるヤングーの儀礼の執行者が、女性であること、またこの儀礼が嫁側の「富の損失」と「災難・病気」を防ぐために行われると述べられていることである。さらに、この論文中には、「ヤンを呼ぶ」時に歌われる韻文も合わせ載せられているのでその一部を邦訳しておこう。

金属が磁石にくっつくように 望みどおりの豊かな富と繁栄が 滞ることなく
喜び勇んで この幸福に満ちたすばらしい家に注ぎ込みますように。—（中略）—
幸運、成功、富、と名声とを呼び出します。8つの吉なるモノより（1984：25-26）。

1.1.1.4 アムド地方の事例

S. G. Karmayは、自身アムド（現中国・四川省）出身のチベット人でボン教徒であり、かつ世界的に活躍しているチベット人学者の一人でもある。彼は、ボン教では結婚の儀礼は重要な宗教儀礼の一つとみなされているとして、それを扱ったボン教のテキストに言及している。中でも、中心的に取り上げて概説しているのは、人間と天の女神の結婚の起源神話である。それ

によると、人間と天の女神の結婚が首尾よく成立すると、天上の神の世界では、人間の下界に嫁ぐことになった妹と天の神の兄とが、それぞれの守護神を呼び出しながら、さいころを投げて財の分与を決める。そして嫁ぐ女神に、父は矢を、母は錘を、兄はトルコ石を贈る。いよいよ地上に女神が降嫁する時、父王の城で僧によってヤングーの儀礼が行われたとある。

この神話では、ボン教のヤングーの儀礼で用いられる矢や錘、トルコ石が重要な象徴的意味を持つものであること、財の分与における男女差の起源、男女それぞれの守護神の区別などの起源が神話の形で示されている。また、Karmayは、人間が天に昇る時の「ムの綱 (dMu thag)」は、結婚式では、花婿の額につけられるものであることや、女神が降下するのに用いる「ヤンの綱 (g-Yang thag)」は、結婚式では、花嫁の額につけられることなどの説明もしている (1998: 148-150)。これらの記述は、ボン教独自の用語法があって難解なボン教のチベット文献を踏まえながらの解説であり、自身ボン教学僧だったKarmayならではの説明で、我々にとっては貴重である。

さらに、彼は、自身の出身地、アムドでの民間の結婚式でのヤングー儀礼に注目し、次のようにその重要性を解説している。

花嫁あるいは入り婿 (マクパ) が、家を永久に離れるなら、その家のヤンも出離するかもしれない。

これはその家族にとっては不幸だとかんがえられている。一方、同様の儀礼が花婿側でも行われるが、

これは、花嫁が富と子孫を婿側の家族にもたらすので当然縁起がよいと考えられている (1998: 149)。

彼のこの記述から、アムドでは、後に触れる私の調査でも同様だが、花婿側と花嫁側と双方でヤングーの儀礼が行われることが分かる。また、その家のヤンが出離する人に付いて行ってしまう可能性があり、そうなれば、家が不幸に陥るとみなしていることも判明する

1.1.1.5 インド北西部・ラダックでの事例

M. PhylactouとS. Dayは、1980年代にインド北西部のチベット文化圏、ラダックで、それぞれフィールドワークを行い、詳しい民族誌を博士論文として1989年に提出した。それらの論文にもヤングーの儀礼への言及が見られる。

Phylactou (1989:252-253) は、花嫁が実家を出るとき、僧たちが、家の中で、花嫁が家産を持つていかにように、ヤングーの儀礼をすると述べ、ヤンとは「繁栄、幸運 = prosperity」の意、ゲーとは「呼び戻す、召喚する、呼び出す = to bring back, to summon」と注釈している。

Phylactouは、この儀礼は、「家の富を増すと同時に、それが減少しないようにする目的でなされる」とわれている。しかし、結婚によって家の富は減少しているのでもないし、出立する娘が生家の富を彼女と共にすべて持っていくわけでもない (1989: 253) と疑問を呈しているが、これに関しては、Dayの「ヤングーが結婚式の中で行われるのは、明らかに世帯の人的資源の減少を補充するためになされる」(1989:198) という解釈のほうが妥当だと思われる。また、Phylactouは、このヤングーの儀礼は一連の結婚のプロセスの中で、唯一その世帯のみに関係した儀礼で、他の出席者や公衆を巻き込んだりはせずに行われるものであることや、花嫁が実家を出立するとき、花嫁は実家に背を向けずに、後ろ向きに出るべきだというラダックの習俗

にも触れている。

1.1.2 人が死亡した場合

以上、結婚式でのヤングーの儀礼に関する主要な先行研究を見てきたが、次に人が死亡した場合のヤングーの儀礼についての先行研究を、その事例は少ないが、取り上げたい。

1.1.2.1 ラダックでの事例

M. Brauenのラダックにおける民族誌(1982: 319)によると、子供が、非常に幼くしてか、最初の歯が抜ける前に死亡して、ボン教の星占い師が、死んだ子供が、家の幸(ヤン)と深く関わっていると判断した時、ヤンを呼ぶ儀礼が行われるという。その後で、子供の遺体は小箱に入れられてその家の壁に埋め込まれると、その家のヤンは保留されたと信じられている。

1.1.2.2 チベット全域

T. Sangyayはチベットの葬儀に関する論文を著しているが、その中で、遺体が家から運び出される時、遺族の女性達が裏戸口のところに立ち、絹布つきの矢と儀礼用スカーフ(カタ)を持って、「幸運の取り戻し(=retrieving of good fortune)」という儀礼を行うと述べている。しかし、この儀礼によって死者があゝ世で貧窮する恐れもあるとしてこの儀礼を行わない家族も最近はあるという(1984: 36)。この記述から、この儀礼の主役は家の女性たちであること、および、これが「ヤンの呼び戻し」と考えられていることがわかる。

また、チベット僧で学者でもある、N. Norbu⁸も、人が非常に長寿で死亡した場合(通常は80歳以上)、それがその家族に不幸を引き起こしうるので、遺体を家の近くに埋葬するか、ヤンを呼び戻す儀礼(g-Yang chog)を行うと注記している(1995: 255 n10)。

1.1.3 家畜等の生産物を売却する場合のアムドの事例

上掲のKarmayによれば、アムドでは、自分の馬を売却したい時、馬のたてがみの一部の毛を抜き取って、それを馬を飼っていた囲いの戸に付けて置くという習俗がある。これは、たとえ馬が高値で売れたとしても行われるもので、馬のヤンを保留するためのシンボリックな行動であると説明している(1998: 149)。

1.1.4 穀物の刈り入れ時や収穫祭直後のラダックの事例

収穫祭の頃のヤングーの儀礼に関しては、前に言及した、S. DayとM. Phylactouが、ラダックで行われる寺を中心とした秋の村共同体の収穫祭に平行して、各世帯で独自に挙行されるこの儀礼に関してかなり詳しい記述を施しているため、ここにそのポイントを述べておく。

まず、Dayによる記述の要点は以下のようなものである(1989: 149-152)。各家庭でのヤングーの儀礼は、ニンマー派の僧を招いて、一日、独自に、外部者を除外して行われる。この儀礼の基本的手順は、次のようである。僧が「福の袋」の上に置かれた絹布付の矢を前に、家の代表の

少年と向かい合って座り、ヤンに関する特定の儀式書を読経し始める。この僧は、矢を取り上げて、家人にその年に失ったかもしれないすべての福、富財を、「吉なるもの」が置いてある祭壇の皿に集めるよう指示する。読経の終了後に、僧が祭壇の皿の吉なるものを福の袋に入れて封印するという手順であるが、その詳細が記述されているのでここに挙げておく。

儀礼用の帽子とスカーフを身につけた家の代表としての少年が、僧の前にある己の描かれた祭壇の前に座らされる。その祭壇には、雛壇状に飾り付けられた練り粉の三種の供物が置かれている。その供物の一つは、宗教の守護者、仏陀等のため、もう一つは家の屋上に供えられる家の神のため、もう一つは、障害を取り除くために外に投げられる悪霊等への供物である。

家人は、それら以外に、僧によって指示された「幸なるもの」：五種の貴金属、コイン、葉の粉末、茶葉、バター、塩、香などを準備する。少年は、右手に矢を、左手に羊の前脚を持ち、僧の読経の合間、僧の指示に従って、「神々に勝利あれ」「福が集められ、(ここに) 来ますように (ヤンゲー、ヤンゲー)」と声を上げ、斎場に酒を振り撒く。悪霊への供物のトルマが外に投げ捨てられると、「福なるもの」が祭壇の皿にさらに加えられ、最後にこれらの福なるものが僧によって袋に入れられ封印される (1989: 149-150)。

さらにDayは、矢はその年に失われた幸運や福を呼び戻す (または呼び寄せる) ための祭具であることや、この儀礼は、特にその地域や家の精霊に向けられたものなので、羊の前脚の供物をするのだという参加者の説明を挙げている。また、ヤンゲーの儀礼が収穫後、冬の来る前に行われるのは、ラダック人は、龍が冬籠りする直前に行われる必要があると考えているからだという。その後は、龍は穀物の中でじっと動かなくなり、龍のやしのある穀物倉に連れて行かれるのである (1989: 150)。

Dayの記述で注目すべきは、「ヤンゲーの儀礼に参加する家の代表者の選択には、男性ジェンダーの優位性が見られる」(1989:151) という点と、「倉庫にしまわれる袋と矢は、家の中の生命、特に来るべき年に育まれる土地の精霊やすべての生命 (力) を内包する」(1989: 152) との解釈が示されている点である。ただ、儀礼のプロセスとしては、悪霊への供物がなされ、それらを隔離した後で、ヤンゲーの儀礼がなされるのが儀礼のプロセスとしては順当ではないかと著者は考える。著者の参与観察したボン教の儀礼では常にその手順であった。Dayの説明では、ラダックでのヤンゲーの儀礼の家の代表者は、男性優位のようなのだが、この点は、他の先行研究者や著者のフィールドワークでの儀礼の執行者達が、女性中心であったのと異なる。

また、Phylactouの論考で特筆すべきは、「ヤンゲーは、家の幸や富を増加するのみでなく、失われたものを元に戻すため、あるいは過去の損失を埋め合わせるため」との人々の言を挙げていることと、「明らかにこの儀礼では、穀物は家の繁栄の隠喩として用いられている」との指摘である (1989: 197) が、これには著者も同意する。

1.1.5 家の新築や移転の場合

前掲のCorlinは、家を新築した場合にも、特定の祭司を招いて、ヤン・レンの儀礼を行ってもらいと簡単に触れているが (1980: 87)、その詳細は記述されていない。

1.2 大乘仏教寺院でのヤングーの儀礼

民間のヤングーの儀礼は、通常は上に挙げたような社会的な折々に、家に僧を招いて行われるが、それ以外に、一般の人が、有名な寺院で、ラマに特別に依頼してこの儀礼を行ってもらい、そこでの「幸なるもの」を「護符」として家に持ち帰る場合もある。ただ、仏教寺院でのこの儀礼に関しては、今までほとんどその詳細は知られていなかった。F. D. Lessingによって記述された雍和宮でのヤングーの儀礼は、著者が知りえた大乘仏教寺院でのこの儀礼の貴重な、かつ良質の先行研究である。ここでは、彼の記述に従って、この寺でのヤングーの儀礼がどのように行われるかを概観しておきたい。

雍和宮は、北京にある大乘仏教寺院であるが、ここでの最も注目される宗教儀礼の一つは、俗人のためになされる「ヤングー＝幸運を呼び出す」（中国語：招財）儀礼だという。財、長寿、地位、権力のような幸や福を得るためのこの儀礼は、ここでは財神、中でも毘沙門天と関係づけられている。また、占星術によってこの儀礼に特に有効であると考えられている仏教暦の日が定められてはいるが、この儀礼に特に凶とされる日以外なら、誰でも依頼することができるそうだ。

Lessingは、この儀礼をするための斎場の祭壇に山と積まれたさまざまな供物の配置のスケッチとそれらの仏教的意味付けや機能をも併せて記述している（1942：140-143）。このスケッチのなかで、①～⑭まで列挙された供物は、①如意樹、如意牛などが置かれている「財神・毘沙門天の城」といわれる三角錐形の構造物、②振り回すヤンの矢 ③穀物倉といわれる「幸運の壺」—中に穀物、葉、7つの高価なもの、8つの「吉なるもの」、貴金属や宝石などが入っている— ④～⑬8つの供物、5つの穀物の供物、儀礼用ケーキ（トルマ）、ミルク、茶等 ⑭羊の肉である。中でも②の矢は重要で、その矢の先端とその4つの羽は、「四方に出没する悪霊をおさえ」かつ「矢によって表された神の呪力が矢の先端を通して全宇宙と交流する」働きを持つとされる（1942：142）。矢のそれぞれの部位、例えば、矢の取手の部分は、「神の体」、矢につけられる鏡は「神の心臓」、矢につけられるほら貝は「神の声」、あるいは「身・語・心」との大乘仏教の解釈が示されているが、これは後述するボン教の矢の解釈ともほぼ一致する。さらに仏教であるにもかかわらず、供物として特異なのは、⑭の羊の肉である。これは、下位の人世間の神々への供犠なので、許容されているのであろう。

以上のような寺側の入念な準備品に加えて、俗人の施主も持参した矢のような棒や「神の埋蔵財の壺」と言われる袋、それに銀塊、銅貨、紙幣、その他さまざまな貴重なものを混ぜ合わせた供物を、祭壇のところに置く。そして彼らの地位とお布施の額に応じて、順次ラマ達と並んで着席する。

いよいよ荘厳な儀礼の開始である。ラマたちは口をすすいで身を清め、陀羅尼を唱えながら香を焚いて場を清める。監督僧が、祭壇に進み、黄色の帽子をかぶって二回手を叩く⁹。この行為は、「悪魔を追い払い、神の注意を喚起するため」である。読経の開始の合図が送られると、監督の僧が柳の枝¹⁰を持って体をゆすり始める（1942：144-145）。

一時間ほどして、読経は財神を呼び出す陀羅尼で頂点に達し、その時ヤングーの聖なる言葉

が唱えられる。ここで呪文をあらかじめ教えられていた俗人の施主たちもその言葉に唱和する。そして「神の呪力（加持）が自分たちに与えられますように」と祈願される。

その後、監督僧が矢を取り上げ、その他数人のラマと俗人の施主たちと共に、斎場の外に出る。矢を持った監督僧を先頭に、それぞれ「多くの供物」、「内部の供物」、「ヨーグルトのカップ」を載せた盆を持つラマ、それに施主の俗人たちが二等辺の形体を取って雍和宮の外のホールを行進し始める。巡回の一行が、財神、毘沙門天のお堂の前を通過すると、その扉＝幸運の門が開けられる。そこで一行は、矢を振りながら、招く動作をする。その動作に呼応して、一行に不可視の神が合流すると考えられている（1942：145）。

さらに、一行は、時々陀羅尼を唱え、ほら貝やドラム、シンバルを鳴らしながら巡幸し、最後に出発した斎場に戻る。この巡行によって、一行は、天、地、太陽、月、川や湖、草木すべての活力を今や受け取った（bcud len¹¹）のである。元の斎場に入るときの規則は、出発した時と逆の順、つまり先頭を逆転しないで、列の最後尾から顔を外に向けて再入場する。この規則が破られると、得たいと望む幸運が即座に喪失されるという。

斎場での最後の祝福後、施主の代表が司祭長に尋ねる。「幸運を持ち帰ったか」「誰に祈ったか」など。それから、司祭長は、施主に「毘沙門天の宝をお渡しする」といって蓋つきの容器を手渡す。参加者すべてが、供物の分配を受け、家に持ち帰るためにそれらを布袋に入れる。最後に、食べ物の供物が分配され、これは、餓鬼や動物、地獄で苦しむもののために外にも置かれる。儀礼終了後、施主たちは「宝の容器」の中の「幸なるもの」のいくばくかを床の上に置く。これは、将来の繁栄を約束するようにとの意図がこめられた象徴的行為である（1942：145-147）。

2 著者のフィールドワークに基づく民族誌記述

著者は、最初に中国・青海省・同仁県チャンチャ村での結婚式（2000年2月）で、ヤンゲー儀礼を初めて観察して以来、このヤンの儀礼とは何かを解明するために、青海省・同徳県、チベット自治区のラサヤボン教徒の村、ニエモ村、さらにネパール・カトマンドゥや四川省阿壩県のボン教の寺院での参与観察や聞き取り調査、および文献調査を行ってきた。ここでは、先行研究を批判的に総括し、それに基づいて著者自身の参与観察や聞き取り調査による民族誌的記述を示す。

2.1 民間におけるヤンゲーの儀礼

2.1.1 結婚式

民間で、著者が参与観察した結婚式は、青海省・同仁県と同徳県での4つの事例（うち一つは婿入り〔マクバ〕婚）とチベット自治区・ニエモ村での聞き取り調査である。

ヤンゲーの儀礼は、Karmayのアムドの事例と類似して、いずれの事例においても、花嫁側（一例は婿養子側）と花婿側（一例は婿をとる女性側）双方において、結婚式の同じ日に頃を見計らって執り行われた。この儀礼を執り行うのは、ボン教の僧か村在住のタントラ僧で、多くの

ケースでは、僧自身が、読経し、時に楽器を鳴らし、時に矢を振り回していた。先行研究の1.1.1.2に見られたような、僧と親族との問答はなく、かなり簡素化されているように思えた。

嫁を出す家では、花嫁の母親¹²が予め穀物倉に保存してあった五色の絹布付の矢を取り出してきておく。この矢は、祭壇としての小さなテーブルの上の、5種の穀物、薬、金や硬貨等の幸なるものを混ぜ合わせた供物やその他のご馳走をおいた盆のところに立てて置かれる。このテーブルに、僧が着席し、矢を振り振り、読経をする。読経する儀式書は、いわゆる「ヤンを呼ぶ経」といわれ、宗派によって異なるが、大枠は類似している。(ボン教の儀式書に関しては、2.3で述べる。) 上掲のCorlinの記述にあった「ヤンが出現する」という儀式と同様、母親は、台所兼居間にある大黒柱の周りをチェ・マル（儀礼用の白いケーキ）を持って、家族を随え、「ヤンよ、来い！来い！」と唱えながら3回回る。読経が終了すると、僧が、テーブル上の供物を「ヤンの壺」か「ヤンの（白い）袋」に入れて五色の紐をかけて封印する。それを式の終了後、矢と共に、母親が穀物倉かヤンの小箱にしまう。

一方、花婿側でも、同様のテーブルと供物を予め母親が準備しておく。花嫁が実家を出た頃を見計らって、母親（ときに長男の嫁）が、家の屋上に昇り、家の神への祈祷をし、そこに立てられたタル・チョー（経文刷りの布の旗）のところで、絹布つきの矢を振って「ヤンよ、来い！来い！」とヤンを呼ぶ。この屋上のタル・チョーがこの家のヤンの最初の抛り所となる。矢を振る方向は、振る母親の年齢から占星術で計算して決められるという。その後この矢は、室内でヤンの経を読んでいる僧のところに持って行って置かれる。僧は、時々儀式書の特定の箇所ではこの矢を振る。同様に、ヤングーの読経の終了後、僧は祭壇上の供物を「ヤンの袋」か「ヤンの壺」に入れて封印し、それは、矢と共に母親によって穀物倉かヤンの小箱かに収められて戸が閉められ、3日間が開けられない。

2.1.2 人が死亡した時

著者は直接観察する機会を得なかったが、チベット自治区、ニエモ村のボン教のラマによると、家から遺体が運び出されるとき、上掲のT. Sangyayの記述のように、戸口で長男の嫁を中心に親族の女性達が、ヤングー（ヤンの呼び戻し）の儀礼をするという。他の人は、晴れ着を着て、シーパ（中有の存在を象徴する画が描かれたカード、srid pa）¹³を持ち、戸外で遺体に向ける。一方、室内では、僧がヤンを召集する経を読み、スル¹⁴という香を焚く。この香を焚くのは、遺体と共に、家の神や龍（klu）、ニエン（gnyan）、ツエン（gtsan）等の神霊のヤンも家から逃げてしまわないように、これらの神霊の目を惑わして、家から出て行かないようにするためになされる方策だという。

また、遺体の運び出しの日に関しては、占星術によって制限が課せられている。つまり、ヤンの曜日、ヤンの星宿¹⁵の日とされる、土曜日と参宿、鬼宿、觜宿の三宿には、遺体は運び出されない。したがって、これらの日には、ヤングーの儀礼はおこなわれないことになる。

2.1.3 家畜や生産物を売却する場合

家畜を売却する場合、Karmayがアムドの事例で言及していたように、チベット自治区や青海省のチベット人は、それぞれ売却する家畜の身体の一部を少し抜き取って、「ヤンよ、来い、来い」と3回唱えながら、簡易のヤングーをする。抜き取った箇所は、「ヤンの拠り所」として自分のところに保管する。家畜の抜き取る部分は、ヤクなら尻尾の毛、馬ならたてがみ、羊や山羊なら身体の毛などどこでもとほぼ決まっている。抜き取った後、それらをKarmayの記述のごとく家畜の元の囲いの柵に吊るしたり、あるいは、保管されているヤンの矢の先端に付けておいたり、ヤンの壺やヤンの小箱に入れて密封しておく。これは、その家畜のヤンが逃げず、増殖するようにするためだとされている。

また、それぞれの家畜には、それぞれの家畜のヤンの星宿がある。例えば、羊のヤンの星宿、ヤクのヤンの星宿のごとくである。この星宿の日には、それぞれの家畜は売ってはいけないという慣例があるので、人々は、その日を避けて家畜を売却する。もしその日に売却すれば、ヤンが逃げてしまうからである。ヤンが逃げると、その家畜が死んだり、いなくなったりするというのである。

次に、穀物を売却する場合、売却する穀物の一部を自分の手にとって、それを一度自分の体に擦り付けてから、売却の入れ物に戻して売するという行動をとる人もいる。こうすれば穀物のヤンが自分のところに留まると思われている。

2.1.4 秋の収穫時

秋の収穫時、各世帯の畑では、成人男子が刈り取った作物の束を持ち、成熟した女達が「チャ(phyamまたはphywa)¹⁶とヤンよ、来い、来い！」と歌い踊りながら、畑の周りを回る。こうしておけば、ヤンが逃げずにその畑に留まり、来年の作柄が良好になると信じられている。

新中国になって、世帯別に土地が割り当てられたが、それ以前には、村全体の男女が背中に経と仏像を背負って共同体全体の畑を回って、その最上のコーナーからヤンを呼んで、受け取り、共同体の畑すべてが増殖するように祈願したそう。

また、前の年、作柄がよくなかった家は、豊作だった富者の家より種子のヤンを少し分けてもらって来て、よき作柄になるように、種蒔きのときも、ヤングーの儀礼をして縁起(=rten brel)を担ぐ人もいと聞いた。

2.1.5 家を新築したり、移転する場合

チベット自治区、ニエモ村では、家を新築した時は、必ず貴重なものを神への供物として供え、呪力の強いとされるタントラ僧かボン教のラマに、盛大なヤングー儀礼を(通常は数日かけて)してもらい、「ヤンの壺」を新たに作ってもらう。この壺は家の繁栄を支える一種の家宝とみなされていて、外部者はその中身を見ることは不可能である。

しかし、幸運にも、その作り方の過程が、ニエモ村のボン教のラマによって(2001年8月)開示されたので、ここにその概要を述べておこう。

1) 盆に入れたネー(裸大麦)を三回に分けて、装飾を施した土製の壺の中に入れる。それに、

金・銀等の五宝石、五穀、薬などの貴重なものを加えて混ぜる。

2) その壺の中央に、「陀羅尼の生命の樹 (gzhungs srog shing)」という四面体の10cmほどの棒を立てる。この棒は常緑の松柏で作られていて、その表面は朱色に塗られている。この棒の上部は少し細く、下部は逆に少し太くなっている。この細いほうを必ず上にして立てる (写真1 参照)。



写真1 穀物や宝石等を入れたヤンの壺とその中央に立てられた「陀羅尼の生命の樹」。
壺の脇に、この樹に巻かれる神々の紙片と、ヤンの神が描かれた画像のカードがある。

3) また、この棒は、ボン教の教祖・トンパ・シェンラップの身体の一部と同一視もされているので、その身体の一部、頭、口、心臓、腹、脚を象徴する五文字が、朱色の棒の四面上に、幸運、繁栄の色とされる黄色で描かれている。さらに、これらの文字の上に目的に応じて、経文や神々の画像が書かれた細長い紙を切り取って巻きつける (次ページの写真2 参照)。

4) 脇の壁には、ボン教の吉祥の神、ナム・パル・ギャル・パを中央にそれを取り巻くジクテンパ (人世間の神) や四大忿怒神が描かれたタンカ (チベットの宗教画) が吊るされている。ここに描かれている神々は、ラマの読経の呪文に呼応して、ヤンを集め、下降させる神々である (次ページの写真3 参照)。

5) ラマは、「尊勝千供」(通称「尊勝ヤンの実施」) という儀式書を読経しながら、絹布付の矢を振り回す。その矢の先端で、目的に応じてそれぞれのヤンの持ち主の神を指し示しながら呼び出す。そしてその矢の先端に呼び出された神々を、壺の中の「陀羅尼の生命の樹」の棒に移す動作をする。これによって、ヤンの神々の呪力が壺の中に入り込むのである。

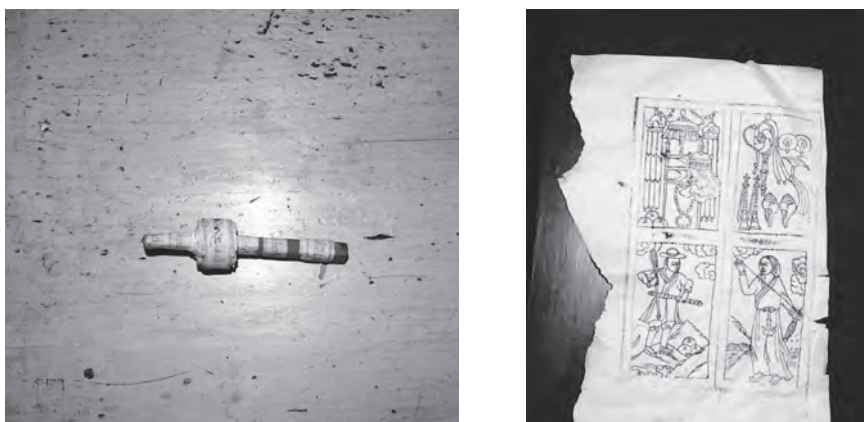


写真2 陀羅尼の生命の樹とそれに巻かれた細長い経文および神々の画像の紙片



写真3 ナム・パル・ギャル・パを中央に、それを取り巻くヤンの八神と四大忿怒神などが描かれたタンカ

6) 儀礼終了後、ラマの手によって壺は封印され、儀礼用スカーフ等が飾られる。この壺は一種の家宝として家のよきコーナーに置かれるか、さらにヤンの小箱に入れられて戸が閉められ、大切に新しい家に保管される。

家を移転するときは、このヤンの壺とヤンの小箱、儀礼用の矢は必ず、移転先の家に移す。これらのみでなく、旧宅の家のサダー（土地神）、龍、ニエンなどの家のヤンの神々も移されなければならない。これを担当するのは、龍が憑依するというル・パ（龍・人=klu pa）という一種のシャーマン（通常は女性）である。このシャーマンが、神懸かって、これらの神々の居場所を見つけ出し、長い白い儀礼用スカーフの上に神々を乗せて移転先の家の最上のコーナーに引導するのである。それから、移転した家の中で、通常のごとく、ラマが、経を読み、ヤンの矢を振り、振りヤングーの儀礼を執り行う。

2.1.6 年一度、力の更新のためになされるヤングー

収穫後から正月の前までの間の月末30日の日に、盛大なものは数日かけて、ヤングーの儀礼を、各世帯で僧を招いて行う。これは、1.1.4のDayの記述したラダックの収穫後の一日、家で行うヤングーの儀礼に相応すると思われる。この時は、家族が、新しいヤン・トル（儀礼用ケーキ）¹⁷をつくり、新たに収穫した初物の穀物、バター、宝石その他「幸なるもの」も新たに準備し、茶や酒も新たに供える。そして僧が、ヤンの小箱や壺を開封し、家人が用意した新しい供物に換えたり、加えたりして、ヤングーの経を読みながら、矢を振って儀礼を行う。その後、再び僧の手によって壺は再び封印され、小箱や家の奥まったところに置かれる。これにより、ヤンの力が更新され、その力は、平穏に行けば、一年間持続すると考えられている。

2.1.7 その他民間のヤンに関連している習俗や行動

その他、チベット自治区のラサや青海省で著者が出会ったヤンに関連があると考えられる習俗や人々の行動のいくつかを、ここで紹介しておこう。

まずラサでは、客として他家に招かれた人が、帰り際、ご馳走になった酒や茶の杯を飲み干さないで、必ずその杯に少しは酒や茶を残しておくか、杯をいっぱいに満たしてからその家を出るという習俗がある。この杯に残された酒や茶を「ヤン・シャー」(g-Yang bzhags)という。これを全部飲み干してしまうと、その家の酒や茶が枯渇する恐れがあるとの客の配慮からのようだ。ただ、大勢で宴を催すときには、「今日は、ヤン・シャーはない」つまり「大いに遠慮なく飲み干そう」といって、残さずにグイグイ酒を飲みほすのである。

さらに、ラサの道端の仏具等の土産を売っている商売人が、朝その日初めて品物が売れた時、客から受け取った紙幣で、いきなりそこに展示してある商品の上を、「ショ、ショ、ショ（来い、来い、来い）」といいながら、叩き始めるという場面に遭遇した。これも一種のヤンを呼び込んで、商品に留まるようにとの祈願が籠められた呪術宗教的行為であろう。

また、青海省で、お金を払うとき、それを自分の懐に擦り付けて、「戻ってくるように」と心で念じながら相手に渡すという人に出会ったことがある。他の人はそれを聞いて笑っていた

が、穀物を売却する直前に、穀物の一部を体にこすり付ける行動をとるチベット人は結構いるから、これも「貨幣のヤン」を「取り戻し」て自分のところに保持するための呪術宗教的行為だと言えよう。

2.2 ポン教寺院でのヤングーの儀礼

これまで挙げた事例からも判るように、民間の各家でのヤングーの儀礼を執り行う呪術宗教者は主としてボン教の僧であった。民間のヤングーの習俗に呼応して、長い年月をかけて呪術宗教的意味づけを行い、体系化したのは、まさに仏教ではなく、ボン教であった。実際、チベット仏教の学僧の中でも、ヤングー儀礼は、民衆の現世利益的な要望に、ボン教が中心になって応え、その後、他の仏教諸宗派にも広がっておこなわれるようになったと認識している僧もいる¹⁸。

それゆえ、民間の習俗をも取り入れ、体系化したといわれるボン教では、ヤングー儀礼はどのように執り行われるのか、またヤングーにどのような宗教的意味づけをしているのかを知ることが必要である。そこで、ネパール、カトマンズにある、ボン教の寺・ティテン・ノルブ・ツェ寺での「ヤンを受け取る (len)」儀礼を参与・観察させてくれるように依頼したところ、著者自身が施主となって執り行ってくれることになった。次の記述は、そのときのものである¹⁹。この儀礼で読経された儀式書は、「完全なる勝利を得る、チャ、ヤン、ム・シャー²⁰を混ぜ合わせる事」²¹と題された経である。

2.2.1 儀礼の準備－記述

儀礼の始まる2日前から、儀礼に必要なので、施主自身が準備するように指示されたものは、中国の硬貨、鏡、五色の絹布、指貫 (sor)、その他貴金属や宝石（特にトルコ石や珊瑚）、穀類、飴粒などの甘いもの、茶葉などと白い「ヤンの袋」、三つの節のある竹（ヤンの矢の胴用）などである。施主である著者が、これらを寺に予め持って行くと、それらは、斎場の祭壇にまず安置され、早速準備が開始された。

そこで、寺側が、準備したものは次のようなものである。

- ① モンラムの樹—クリスマス・ツリーに似て、晴れの日祈願用の常緑樹。枝にリンゴや羊の毛、絹布、飴粒などさまざまな吉なるものを豪華に飾る。通常は、この樹は、結婚式や正月などに家の台所兼居間の大黒柱に結びつけられる。儀礼書には、この樹にさまざまな吉なるものを結び付けるとある。

しかし、このときの儀礼では、結び付けるべきヤンのものは、ほとんど祭壇上の白い盆に置かれるか、ヤンの矢に付けられた。この祭壇そのものは、白い羊の毛で作られたフェルト²²敷きで、その上に白米で、ユンドゥン（ボン教の逆卍）が描かれている。

- ② ヤンの綱 (g-Yang thag)²³—天上から神々が下降するときに用いられるとされる綱。
- ③ ムのはしご (dMu skas) —九段の刻みが付いた15センチほどの木製のはしご。九層の天界へ昇るためのものとされる。

- ④ ヤンの（白い布）袋—儀礼後、ヤンのものの供物を入れる。施主は護符の財としてこれを家に持ち帰る。
- ⑤ ヤンの神々の画像のカード—ナン・パル・ギャル・パ（mam par gyäl pa）の保護神を筆頭に八つのヤンの守護の神々の画像、および悪霊 デ（'dre）からヤンを守護する龍・ガルータ・白獅子などの画像のカード
- ⑥ ヤン・トルーヤンの拠り所としての儀礼用ケーキ。九層からなるとされる宇宙全体を象徴したもの。その作り方のプロセスは、次のようである。

1) 花形の碗に白米をしく。2) その上に、ツァンパ（大麦を粉にしたもので主食とする）とバターを捏ねて、5ミリ程度の厚さの円形のものを九層に重ねて、円錐形のものを作る。一番下の円形の周りには、人世間のヤンの神々を象徴して具象化した八つのとんがり棒型のものがあり、その間に丸い団子状のものと、五穀を混ぜた「ヤンを招くもの」²⁴を入れるカップ状のものが配される。3) 円錐形の全体の表面に、溶かしたバターが塗られる。4) その上に、バターを水で固めて白くしたもので、月や星や花形を作り、とんがり棒状のものや円錐形の上部を飾る。5) この円錐形の一番下の段のところに作られたカップに、「ヤンを招くもの」を入れていく。この「ヤンを招くもの」は、前日、ラマが混ぜ合わせて「ヤンの白い袋」に入れて、祭壇に置かれていたものと同じものである。6) 最後に、五色の布を飾った矢が、このトルマの後ろ側に立てられる（写真4参照）。



写真4 逆卍の上に置かれたヤン・トル（左側）とヤンの白い袋、神々の画像のカード、矢に付けるトルコ石と鏡が置かれた盆

- ⑦ ヤンの矢—三つの節のある30～40センチ程の真直ぐな竹（著者が近くのエで取ってきたもの）を用いる。矢の先には、鷲の羽を3枚、矢の羽としてつける。矢の胴の部分の一番上のところに、五色の上質の絹布を豪華に飾り、トルコ石、鏡、指貫、などを結びつける。矢は、「ユンドゥン（ボン教の逆卍）命の神」であり「不動の生命の拠り所」、三つの節は、「身・言・意」であり、矢の胴は、「封じ込めた命のお顔」、五色の絹布は「神の装い」、矢の羽毛は「不死の命の御体」、鏡は「命の神々のお体」等と言われる。
- ⑧ チェ・マルー白い儀礼用ケーキ

- ⑨ 燈明—バターを用いる
- ⑩ 鷲の爪—悪霊を隔離するとき、それらを脅すために用いられる。本物の鷹の爪だという。
- ⑪ ム²⁵・シャー、またはム・シャック (dMu zhags) —溶かしたバターの液に薬の粉を混ぜたもの。
- ⑫ 野ウサギー人へのすべての計略をめぐらす、あるいは「心臓を盗む」動物とされる。ツァンパとバターを捏ねて粘土状にしたものでつくり、濃い水色の色で彩色されている。このウサギの周りを、セ・ラー (bse rag) という諸々の欲張り鬼または損耗鬼たちが取り囲んでいる。
- ⑬ 農夫—野の細長い草で人の形を作る。背に刈りいれた作物を入れた籠を背負う。悪鬼がこの作物を盗もうとするので、後ろから鷹の爪で脅すのである。
- ⑭ 替身物品 (glud rdzas) —人へ害を及ぼすセ・ラーにあたえる供物。これは、黒い袋に詰められ、野うさぎの背中に置かれる (写真5 参照)。



写真5 替身物品を入れた袋を背負ったウサギと、それを取り巻く悪霊達

Lessingに倣って、斎場のスケッチ (図1) と供物台 (写真6) をここに載せておく。

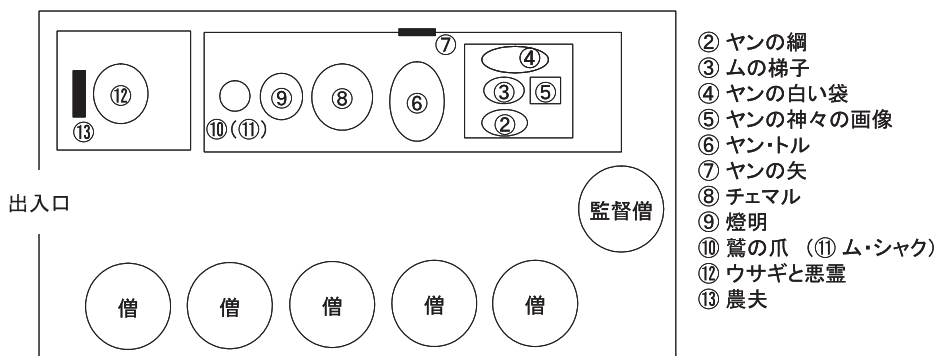


図1 斎場のスケッチ



写真6 供物台（図1の右から②～⑩の供物の配置に対応）

2.2.2 ポン教の寺でのヤングーの儀礼のプロセス—記述

いよいよ、ヤングーの儀礼が開始される。

- 1) マスクをした僧が、香（常緑樹の松柏の枝）を焚いて、斎場を浄化し終わると、鉦が鳴らされ、儀礼の始まりが告げられる。これを合図に、6人の僧による読経が始まる。
- 2) 儀礼の最初は、セ・ラーやデの悪霊や悪鬼の隔離が行われる。儀式書で、この隔離の段が読経されると、斎場の出口付近に置かれていた、上述の⑫～⑭のウサギと悪鬼の置き台が外に運び出される。草や笹の葉で作られた農夫の背中の籠に悪鬼が入り込まないように、後ろからマスクをした僧が、上述の⑩の鷹の爪で脅しながら進む（写真7 参照）。



写真7 ウサギと悪霊の斎場および寺の境内からの隔離

- 3) ウサギ等の置き台は、寺の境界の外まで運ばれ、外向けに放置される。これにより寺の境界より悪鬼達は追い出されたのである。
- 4) 斎場のほうに戻ってきた僧たちは、斎場の出口の外に、砂で峠を作り、レンガでトゥ（tho:

邪魔者を避けるために作られる一種の呪術儀礼の柵)を作って、デが再び入ってこないための防壁とする(写真8 参照)。

- 5) 僧たちは、斎場に再び入って着席すると、再度香が焚かれ、場が浄化される。ここで、鷲の爪が置かれていた祭壇の場所に、替わって大きなボウルに入った溶かしたバターと薬を混ぜ合わせた「ム・シャー(又は、ム・シャック)」がマスクをした監督の僧によって置かれる。それと同時に、ほら貝、ラッパ、シンバル等の楽器が一斉に鳴らされる(写真9 参照)。
- 6) 監督の僧が、ここで祭壇からヤンの矢を右手に取り、左手に線香を持って、読経に合わせて矢を振り回す。数十分矢を振り回した後、ヤンの矢は、祭壇の中央に戻される。
- 7) 読経が、「ヤンを集める」という段落にくと、読経は中断される。ここで、施主と読経をしていた僧たちと、他の二人の僧が加わって、斎場の外に出て、一列に並ぶ。先頭は、香炉を持つ僧、ヤンの矢を右手に、チェ・マルを左手に持つ施主、儀礼用スカーフの上に



写真8 トウの防壁



写真9 ム・シャー(または、ム・シャック)

ヤンの白い袋と上述の⑤のナン・パル・ギャル・パ以下の宝の真の持ち主の神々たちの画像のカードを載せた盆を持つ僧、ヤン・トルを持つ僧、読経しながら楽器を鳴らす僧5人の計9人の一行である(写真10 参照)。



写真10 「ヤンを集める」ため、寺の境内の巡行の開始

- 8) 一行は、一列になって、寺の本堂を中心に、左周りに巡行を始める。本堂の前では、丁寧に礼拝し、その他のコーナー、コーナーで立ち止まると、施主は、矢を振りながら、「ク・イエ！²⁶ヤンよ、来い、来い！」と声を上げる。他の僧は、読経をし、楽器を鳴らす。
- 9) 数十分の巡行後、一行は斎場に戻り、ヤンの矢は再び祭壇の中央に置かれる。その後、読経は再開されるが、それも「今日、施主が、ク・イエで呼んで（'bod）、四方のヤンをここで受け取る」という内容の段落で終了する。
- 10) 最後に、この寺の最高位のラマ²⁷が、やって来て、ヤンの袋を縫い合わせて蠟で封印する。それから、この袋と、ヤンの矢、ムのはしごを施主に手渡し、供物皿のヤンのものの残りを斎場にばら撒く。これは、将来の繁栄の「種」とするための呪術宗教的行為である。儀式でのヤン・トルは、三日間儀礼をした場に置いておくという（写真11 参照）。



写真11 ラマがヤンの袋を蠟で封印

2.3 ポン教のヤングーの儀式書の一例

民間のヤングーの儀礼の呪術宗教的意味付けをしているのは、この儀礼を司率する呪術宗教者であり、かつ彼らが読経の時、依拠している儀式書である。従って、この儀礼の意味をより深く理解するためには、儀式書の文献研究は重要である。特に、ボン教は長い伝統の中で、民間信仰の要素をふんだんに取り入れて体系化しているので、ボン教の儀式書の文献研究は不可欠である。

そのような折、四川省・阿壩県のボン教のアムド地域の本山・ナンシー寺（中国語名：郎依大寺）で、この寺の、ヤングーの儀礼の主要な儀式書を入手した。この儀式書は、ネパールのボン教の寺で入手した儀式書の、7倍程のボリュームがあるが、著者が調査した民間の儀礼に密着した具体的記述に富んだ貴重な文献であることが判明した²⁸。しかもこのアムド地域は、中国・チベット文化圏の中でもボン教の教勢が、伝統的に強く、その上、この地域のチベット人の多くは、ヤングーの儀礼を盛大かつ頻繁にやる習俗を今なお強く保持している。よって、この儀式書は、民間のヤンの概念や、意味付けを深く知るために重要だと考えられるので、その中に

述べられた具体的な文言の引用を交えながら、この経の全体を概観しておく。

この儀礼書は、「十万の白いヤンの功德、チェ・マルとダー・タルの讃頌」²⁹と題され、儀礼用のケーキ、チェ・マル（上述の供物⑧と写真6参照）と絹布つき矢の儀礼用道具を讃え、それによって多くのヤンの功德が得られますようにと祈願する経である。チェ・マルと絹布つきの矢（ダー・タル）は、この儀礼のなかで最も重要な用具である。これらがボン教でどのように意味付けられているかがこの経によってよく理解できる。

1) まず、この経は、チェ・マルとダータル（絹布付き矢）を褒めたたえる文言で始まる。このチェ・マルを、イ・ダム（護法尊）、ボン教の護法神（skyong）、財神、戦いの神・ダラ（sgra bla）³⁰、土地神（gzhi bdag）、国・神（yul lha）、チャン・セン（cang seng:家の食物の神あるいは、かまど神の一種）³¹が取り囲む。このチェ・マルの供養には、灯明と香を焚いて、五種の穀物と宝石、神の衣のような上質の絹、および茶、酒、ミルクなどの供物を白いフェルトの敷物の上に置くように。また、ダー・タルも、同様の神々が取り囲む。この矢は、揺れる上質の絹と白い羊毛で飾り、（神々の）拠り所（支柱: rten）として献ずる。この矢の意味づけは、上の2.2.1の⑦で述べたところと同様である。

2) 「今日、最上の住处であるこの宮殿（祭壇のチェ・マルあるいは祭壇そのもの）である、ゆるぎない拠り所にお座りくださるよう」と祈願し、陀羅尼を三回唱えて、「ヤン・セー（sras:ヤンの神の息子、ボン教では神より少し位が低いとされる）に帰依します」と述べる。そして、土地の女神の珍宝の壺を膝に置いて、

大神、ナンパ・オー・デン（光明を具有する神）様、ヤンの成就是あなた様にあるといわれています。私には、ヤンがないのであなた様にあるヤンの成就をお授けいただきたいのです。—（中略）—その代わりに、私は最高のものをあなた様にお供えいたします（3b）。

と、瞑想して念ずることによりヤンの成就があたえられると。

3) そこで、コン・ポ（mi la 'gong po:人に害を与える九種の邪鬼）を隔離する文言が述べられる。さまざまなコン・ポが、チャ、男の力、女性の下半身、女性の子宮、新婦、などを盗まないように、家畜から絞った食べ物や収穫した穀物を盗まないように、「この場所に居らずに、他所へ去れ」、各種の「コン・ポは、バターに追い払って閉じ込める」などの脅し文句が連ねられて、隔離される。実際、ツァンパとバターで作って赤く塗られてあった野ウサギと九種のコン・ポとそれらへの替身物品とが火の上で燃やされる（写真12 参照）。



写真12 替身物品を与えられたコン・ポを斎場から隔離して、野に廃棄

読経していた僧は、ここで手を叩いて、邪魔を追いつ出す動作をする。そして、燃やされているコン・ポたちは、まさに経文通り、外に持ち出されて、野に捨てられる。これですべてのコン・ポを追いつ払うのが完了する。

- 4) 祭場を焼香で浄化後、「ソ！今日サムサラの空で、天空を占うと星宿が良い、土地を占うと日時が良い、人を占うと印相が良い、どう占っても良い兆候」である。よって今日、神の白い基盤のヤンの拠り所で、光明大神以下、龍、チャの王や、聖山、聖湖の神々によって、このところにヤンの加持（呪力：byin）が降りますようにと前半部で祈願がなされる。

ヤンの加持を降ろす後半部では、

滋養物や薬による、供養をして、ヤン・セーの化身する神に捧げます。ケー（掛け声）、ヤンが廣大無辺に散らばっていたら、今日集めます。ヤンが衰えていたら、今日回復させます。ヤンが裂けていたら、今日縫い合わせます。天空を雲が覆うように、今日、ヤンの加持が降りますように（9 a）。

とヤンの加持の下降が祈願される。

- 5) ヤンを呼ぶ前半部には、上述の神々や聖山、聖湖、その他家畜や、大麦、茶などで有名な生産地を挙げ、そこにはそれぞれの埋蔵の宝がある。それを、「ク・イエ³²（引っ掛ける感じの掛け声）！ チャとヤンを受け取る」。例えば、

中国五台山の頂には、黒い中国茶のヤンがある。—（中略）—ホル（モンゴル地域）のチョク・ラ・ツェ山の頂には、アウ・ホルの馬のヤンがある。アウ・ホルの馬のヤンを、ク・イエ、チャとヤンを受け取る。チャが回るには、カ・ラ・ラ、ヤンが回るには、キ・リ・リ、チャ・ヤンの宝の成就を授けたまえ（12 b）。

のごとくである。

ヤンを呼ぶ後半部は、四方八方の方角におわすヤンの女神たちが、それぞれの財がある天神や龍の国より、釣り針でチャとヤンを引き寄せて、「ク・イエ！ チャとヤンを受け取る」。その「無尽の埋蔵の宝の成就を授けたまえ」と祈願される。

- 6) 次に、寿命を延ばす方法が述べられる。眷属を伴った光明大神、（仏教で言う）四天王寺、女神・南斗六星、二十八宿らによって、人の寿命が延び、チャ（この場合のチャは命の意に近い）・ヤンが守られますようにと。

- 7) さまざまなヤン・セーが、それぞれの富の「ヤンを大集合させること」に関して述べられる。例えば、次のようである。

チャ・ブ・ヤン・カル（チャの子・白い羊）というヤン・セーが、富者の蔵より、富（アムド方言では、家畜）のヤンを集めて、この地に至らしめる。—（中略）—招くには、矢と絹布で招く。至るのは、供物と拠り所に至る。ク・イエ、チャとヤンを呼び寄せる（16 b-18 b）。

さまざまなヤン・セーには、デイ（³³bri）、山羊、馬、畑、食物、油のそれがあり、これらのヤン・セーが、富者の蔵よりそれぞれの富のヤンを集めて、この地に至らしめる。

- 8) 流浪している（ここにいないであちこちに流浪するの意）各種のヤンを招来し、この場所に来臨させることについての章が続く。

もし、チャ・ヤンがさまようことがあれば、（～の神名）人世間の意（yid）の神通によって、チャ・

ヤンが、どこをさまよっていても、今日招来し、この地に至らしめる（18b-20b）。
 さまようヤンは、人、馬、羊、山羊、牛、財宝、畑、大麦、バター、門戸のそれ、さらに
 炉の神、男神、ダラの神々も流浪するとされる。それらを人世間の神々の神通によって、
 ここに来臨させるとする。

- 9) 戦いの神、ほら貝、トラ、白いライオン、その他ヤンを守る四方の守護の神によって、周
 りを取り巻く自然の聖山、林、大海、四方角のヤンが守られるように、また、神々の大王
 たち、須弥山の頂や龍、ニエン、ドゥーなどの国より、ヤンを降らせ、そして、上述の7)
 や8) の人や家畜や財宝が、今日、ヤンのこの囲いに満ちるようにと祈られる。
- 10) ダ・デン・チェン・ポ（矢・大引導師）の女神たちは、家畜や大麦、バター、食物、商品
 などのそれぞれのヤンの源（'byung）の神々であるが、これらの神々に対して、例えば、
 次のように祈願される。

人のヤン（ミ・ヤン）の源の女神は、寿命の神・テンマー（中略）—お手には、慈悲の釣り針を
 もたれる。太陽の四方八方から、ミ・ヤンを集めて、この地にこられるよう。招くには、矢と絹
 布で招く。来られるなら、供物と拠り所に来られよ（23b）。

- 11) ヤンのゾモ・ドン・リ・カルモ³⁴のヤンを呼ぶ章が続く。

ゾ！ゾ！（ゾモを呼ぶときの掛け声）、ヤンのゾモ・カルモよ、今、あなたは山に行かず、（私の）
 家を取り囲め、今、家畜のヤンのこの囲いを、身体とその影のように取り囲め。—（中略）—
 このヤンの拠り所を御心の拠り所となされよ、このダータルをお体の拠り所となされよ。この神の
 基盤をご覧になられて、神のやしろ（のここ）を留まるところとなされよ。（この地に来られて）
 この施主をお助けくださるよう。信心を持つ施主が、三つの白いものを献じます。揺れる絹布が
 奉納されます。—（中略）— 祈祷するには、茶と酒で祈祷します。供養するなら、大麦と米で供
 養します。供養をするなら、ヤクと羊で供養をします。—（中略）— 願い事と珍宝が雨のごとく
 降りますよう。今まで望んでいたものが山のごとく積み上がりますよう。今日、—（中略）—
 ヤンのこの囲いに、ヤンの成就が雨のごとく降り注ぎますよう。キ・ソ・チャオ！神々に勝利あ
 れ！³⁵（25b~28a）

- 12) 子宮の中（胎児）の神である私（＝施主のこと）は、次のようにして、それぞれのチャと
 ヤンを取ると述べられる。

100頭の馬は、あちらに（向こう側、つまり買い方）に送っても、馬の神・ニエン・カルは手放さずに、
 ヤンを取る。それは、チャとヤンの拠り所である（ので）、ク・イエ、（その）チャとヤンを取る。
 —（中略）—（また）礼拝用の食物は、向こう側に送っても、黄色のディのバターと、多くの白
 い穀物と、ダン・ゲー³⁶の茶碗と、ヤンのヤク、羊、山羊の三つと、ナム・ツェ・ラ・ゴ³⁷と、チャ
 が増殖し、ヤンが増殖する、清浄な脚の肉、ヤン・モ・ル（ヤンの羊）の上部の肉、と—（中略）
 —これらは手放さないで、ヤンを取る。それは、チャとヤンの拠り所なので（28a~29a）。

向こうに、送らざるを得ないものとしては、上記以外のものでは、ヤクや羊などの家畜、
 穀物の大麦や小麦、バター、男や女の子、花嫁、売買する食物、商品、財宝、畑などである。
 それに対して、手放さないで、自分のところにヤンを取るのは、固有名詞がついた、それ
 ぞれの家畜や穀物の神々、男の子の戦いの神であるダラや花嫁の母神など、あるいは、ヤ
 ンの神の拠り所である儀礼の用具や供養するものである。

逆に、向こうから、人、食物、花嫁、家畜が来たら、それらの「ヤンよ、ついて来い」(30 a)といわれる。付いて来たら、そのヤンを受け取れとある。

施主が欲するさまざまなヤンのモノに応じて、それぞれ異なる神々が来られる抛り所として設ける儀礼の用具は、ある程度決まっている。例えば、家畜のヤンを祈願する場合には、実際に用いられる鼻輪や綱などが抛り所として挙げられ、具体的である。また、男の神や母神、命の神に関しては、宇宙の卵が割れて生まれたという神話から始まり、多種多様な神々の系譜も併せ述べられている。

- 13) 次に、さまざまなチャとヤンは、特定の場所に、特定の星宿の日に「逃げる」ことが述べられる。そこで、それらと呼ぶのも、その逃げた場所から、その星宿の日に呼ぶようにとある。例えば、

女性のチャとヤンと呼ぶには、金の錘に付けたトルコ石に呼ぶ。マサンの湖の深みより呼ぶ。とかきの日に逃げるので、呼ぶのもその日に呼ぶ。財の神、ヤブ・ユム・ツ・モ・チェよ、女性のチャとヤンを呼びたまえ (48 b)。

青々としたネー (大麦) のチャとヤンと呼ぶには、多くの小さな蔵に呼ぶ。箕宿の日に逃げるので、呼ぶのも箕宿とひつきの日に呼ぶ。天空の神、デ・ブム・トゥ・モ・チェよ、青々としたネーのチャとヤンを呼びたまえ (50 a)。

のごとくである。

- 14) 次に、チャとヤンを持つ財宝は、宇宙の神々の階層化された国々では取り出せないで、それらを取り出すのは、施主の用意したさまざまな貴重財のあるこここそ、好ましい。だから、(ここで) ユンドン・人世間の神々を、ク・イエ (の掛け声で)、集まらせ、取り出すのだといわれる。
- 15) 四方のヤンの門をニエン・ボが守るように祈願され、この門には、「施主でない他の人を近づけてはいけない」(65 a) とされる。その後この門は封鎖されるのである。
- 16) 「善なるかな 吉祥よ、来たれ」との請願の言葉と、「瞑想して (それに) 心を集中」(68 b) すれば、「今日、(さまざまな幸や富の) チャとヤンを受け取る」とされる。最後に、請願文「すべては、吉祥なり、善なるかな」(74 a) で終了する。

3 ヤングーの儀礼の特質

以上、民間のヤングー儀礼やボン教の寺での儀礼、およびボン教の儀式書の一例をみてきた。この章で、以上のヤングー儀礼の民族誌から、この儀礼の構造的特質をまとめると次のように言えるであろう。

- 1) この儀礼を各世帯で執り行う場合、特定の僧を家に招き、読経等を執り行ってもらう。招かれて、儀礼を執行する僧は、一般の大乗仏教の僧ではなく、呪力が強いとされるボン教の僧か共同体の特定のタントラ僧が選好される。そこで読経される儀式書は、ヤングー用

の特定の経が用いられる。

- 2) この儀礼を主催する世帯の代表者は、ラダックの例を除いて、通常、家長の男性でなく、母親を代表とする家の女性達で、時として成人男子ではなく少年である。これは、収穫祭での共同体全体の祭祀が、女性を排除した、各世帯の家長を中心にした成年男子たちによって執り行われるのと対照的である³⁸。

- 3) 儀礼でヤンを集め、呼ぶ空間には、家でも寺でも、内と外の対立が見られる。

外から嫁やマクパを取る場合や、寺で特別にラマにヤングーの儀礼を行ってもらう場合、ヤンは屋上や寺の屋外で、呼び集められる。そして、それを、屋外で、絹布付の矢を振って、外に持っていったチェ・マルやヤン・トルのような抛り所の供物に付着させる。また畑の場合は、外の畑で儀礼をして、その畑にヤンを付着させる。

それに対して、家の内から外へ人的、物的資源の財が移動した場合、それらの資源のヤンの「償還」の方策として、ヤングー儀礼が、他人を入れず、世帯単位の閉じられた空間で行われる。つまり、ヤン（あるいはヤンの神々）は、小宇宙としての家やテントの煙出し口から、矢を振る旋回運動に呼応して屋外から入り込み、家の大黒柱を経て、供物台のチェ・マルや家畜の身体の一部を混ぜ合わせた供物の抛り所に下降し、そこを住处とするとみなされている。

- 4) 3) のヤンを集め、呼ぶ空間の内・外の区別に対応して、ヤンそのものの属性にも内・外の空間に対応した区別が存在する。

屋外で呼んで集める、ヤンは、外を「流浪している」自由霊のような超自然的な何かと想像されている。それに対し、屋内でのヤンは、その「自由霊」のようなヤンが、家の外から下降してきて、家に入り込み、家の空間内で儀礼の過程を経て、最終的には家の空間内で、袋や壺や小箱に「閉じ込められた霊」のような不動のヤンへ変容し、壺や箱に閉じ込められ、住まうとみなされている。

- 5) 「彷徨する」自由霊のようなヤンの真の統御者やヤンの貴重財や富の真の所有者は、人世間の強力な、天空の神々である。

一方、「閉じ込められた霊」のような不動のヤンの所有者は、それらの神々のうち、特に家や村共同体の超自然的な存在、つまり家や地下界に住むとされる龍やサダー（土地神）や、時に女性を守護する母神などと考えられている。

- 6) 上掲の儀式書で「～の貴重財や人は、向こうに手渡しても、～の神（のいる部所）は手渡すな」といわれたり、一般の人が、財や富の売買をしても、財や富の根源＝ヤンの担保としての部分を相手に渡さず自分のところに保持するのは、それが、ヤンの付着するための部所であり、神の力によってヤンが下降し、増殖するためにそれを抛り所にする必要があると考えられているからである。

- 7) 財には、向こうに渡すことができる貴重財と、向こうに渡すことができない富や財との区別がある。

それは、儀式書の中でも、①□+ヤンと、②ヤン+□の二つの語形成の区分によって明示

される。① □+ヤンの□にくる財や富は、向こうに渡すことが可能な財や富である。これらは、上掲の儀式書7)や8)のような家畜や穀物、人など、チベット人が貴重な財や幸と考えるモノである。一方、② ヤン+□の□は、世帯内でのヤングー儀礼に関係した、上掲の6)の「～(財や富)～のヤンの神々」や、神の拠り所となるモノあるいはヤンの下降する基盤(ヤン・トルやチェ・マル)、家に保管される儀礼用具(特に矢や壺)などである。これらは、向こうに渡すことのできない聖なる、家宝のようなもので、家の奥まったところに保存されるのである。

①のタイプのモノに付くヤンは、上掲の5)の「自由霊」のようなヤンに対応するともいえよう。②のタイプのモノに付くヤンは、上掲の5)の「閉じ込められた霊」のようなヤンに対応するとも考えられる。

- 8) 全体的に見て、ヤングー儀礼を行う目的は、Phylactouの解釈にもあったように、積極的に家の幸や富を増加させる目的の場合もあるが、むしろ、世帯の幸や富、人などの資源が減少の危機に瀕する可能性がある場合、あるいは資源の財や人が売買や交換に供される場合に、その「失われたものを元に戻す」「過去の損失を埋め合わせる」目的のほうが、より重要視されているといえよう。

最後に、これらの特質を持つ、ヤングーの儀礼の構造を図示すると、次頁の図2のようになりそう。

まず、人間の社会において、家を中心に見ると、財の移動の方向には二つある。これを図示すると、図2の①と②のようになる。

①の場合は、貴重な財や人が、家から外部の交換・交易の世界に出て行くケースである。このとき、人々は、この矛盾した状況を克服するために、何らかの償還の方策が必要と考える。貴重なモノの一部分を家に持ち帰ったり、そのモノを一度自分に付着させて、家の内部にそれを持ち込む。それから、それらの財の喪失を補充・回復して、元の状態に戻す方策が考えられる。

②の場合も、①の場合と類似するが、戻りとしての担保物は必要なく、こちら側に來た貴重なモノを積極的に受け取って、離さず、増やす方策がなされる。

その両方の方策へのチベット人の解決方法が、それら実在の貴重なモノの内部には、生産的な、増殖する呪力＝「豊饒性の元」が有り、しかもそれは実在のモノから分離し、取り出せる「霊的な源」であると想像することである。これが、富や幸の根源つまり「ヤン」を呼ぶ呪術宗教的行為となる。このようなヤンは、霊的な起源を持ち、ヤンの呪力は本来、超自然界のさまざまなヤンの神々の統率下にある。ヤンの統率者やヤンの財の保持者である神々は天空界から、地上の人間界、地下界まで階層をなして、人々の居住領域を取り囲んでいる。その神々を動かすために、家人は、ヤンの神々に、供物や供儀をしてヤンの下降を乞う。まさに、神とのやり取りの交渉である。神は、人間の贈り物への反対贈与として、確実に、施主の祈願に応じて、ヤンを集め、下降させてくれる。祈願する人は、神々が下降させるヤンの受容器として、チェ・マルやヤン・トルやさまざまなよきものを混ぜた供物をヤンの呪力の拠り所として用意

する。そして、矢を振って富の統率者からのヤンを引き寄せ、その拠り所に入ってもらふ。その時、呪力の強いとされるボン教のラマやタントラ僧が、神々と一般人の仲介者として介在して、その力を発揮する。最終的に、この僧の仲介によって、ヤンの呪力＝加持が壺や袋に密封され、その聖なるモノは、家の母親によって、龍の棲家とされる穀物蔵に保存される。そこで、龍の力をも得て、ヤンは増殖すると信じられている。

◎ヤンの真の制御者である超自然界の神々

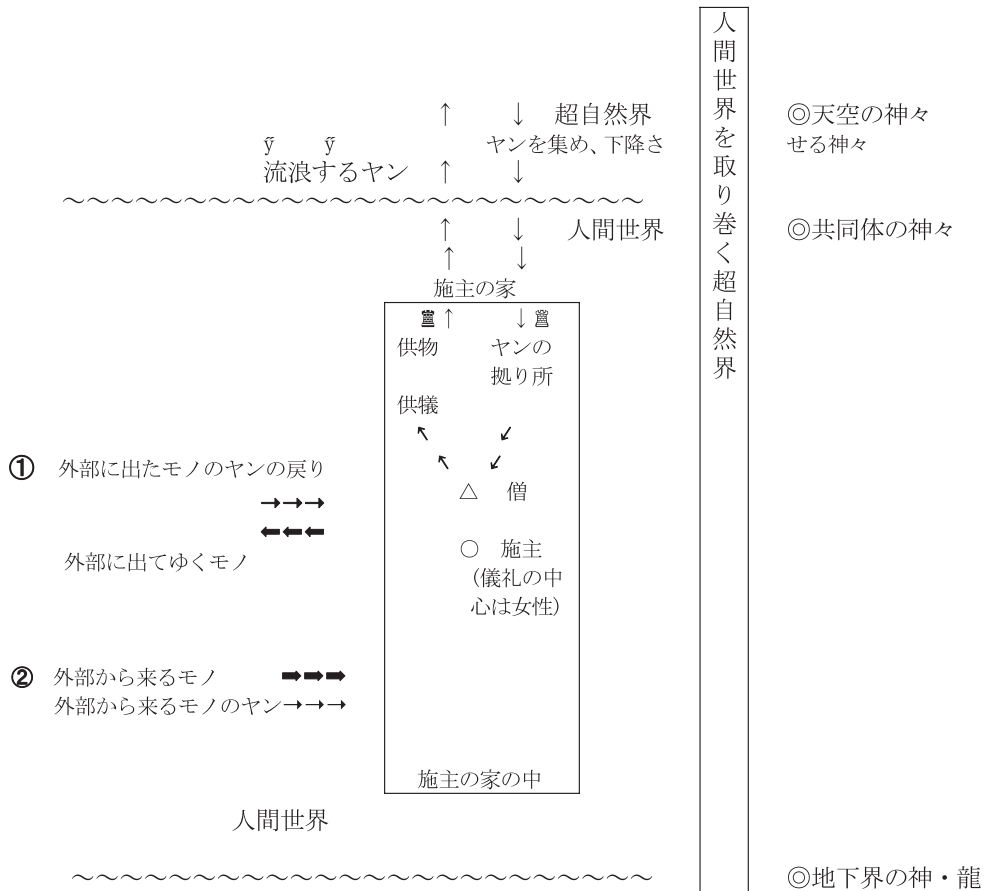


図2

ヤン・ゲー儀礼は、構造的にみると、このように、實在のものの循環のサイクルのなかに、増殖力、生命力の源泉＝ヤンの真の統率者あるいは財の真の保持者としての超自然的な神々を介在させることによって、モノの循環を効果的に作動させ、交換・交易による富の消失を回復させる仕組みになっているのである。一方、交換・交易の場に出ない聖なるモノは、家の中に神々の宿り場として保持されるのである。このようにして、源泉は源泉として保持され続けることになる。

おわりに

以上ヤンを呼ぶ儀礼の民族誌的記述を、先行研究批判、フィールドワークに基づく記述、および文献分析からの記述を通じて、行なってきた。この儀礼の大枠はほぼ記述しえたと思うが、その儀礼に類するものや、ヤンに類する概念は広く、世界的にも観察される。それらとの比較に立脚した、普遍性にかかわる人類学的視点からの分析は、稿を改めて行いたい。

注

- 1 以下、すべて、チベット語のスペルをローマナイズしたものを表記する。
- 2 彼に関しては、河口慧海『チベット旅行記 (三)』(1993:158-159)に、1881-1882年頃、シガツェ、ダージリンに1年ほど滞在し調査を行ったとある。また河口の著にも結婚式で、ボン教の僧を招いて龍(ルー)を家に留める儀礼をする事が述べられている(1993:118-119)。おそらく、ヤングーの儀礼に類似するものと考えられる。
- 3 中央チベット地域の結婚式の記述に関して、「結婚式と商取引は懇願(物乞い)はあるべきではない」というチベットのことわざを挙げ、結婚式の交渉と商取引のそれとの類似性を指摘している。また、シッキムでの結婚習俗では、花嫁代価が社会階層によってほぼ決まっており、貴族層では、18頭の子馬や妊娠した雌馬、金、8オンスの銀、絹の服等9のもの、中間層の庶民は、12の子馬と5つのもの、貧者は1頭の子馬と50ポンドのバターであったと記述している(1893:21)。
- 4 Corlin、1980: 87。居住領域である家が小宇宙だという見解は、Stein(1993:244)にも詳しい。
- 5 この僧は、ニンマー派かカギュ派に属する特定の家系の世襲の僧。
- 6 この構造物は、青稞とバターでこねて作った儀礼用ケーキで、各段には、食べ物やその他の供物が置かれる。最上段には、米粒、宝石、金などとともに中央部に鏡と絹布つきの矢が立てられる(1980:89)。
- 7 西藏西北部の地名で、かつて王国が成立していた場所。
- 8 彼の著書(1995:第五章)に「チャのボン; 繁栄のための儀礼」の章がある。その章で、彼は、ヤンを呼ぶ代わりに、チャを呼ぶ表現が繰り返されるとして、ヤンとチャを同一視しているが、ボン教の儀式書では、チャとヤンは区別され、ヤンに結合する動詞や名詞で、チャには用いられない動詞や名詞、例えば「受け取る (len)」や「立てる、集める (slong)」, 名詞「矢」や「握り所」がある。よって、チャとヤンを即同一視するのは問題で、この二つの語の関係には更なる考察が必要と思われる。
- 9 儀礼中に、手を叩くのは、私が参与観察した四川省ボン教の寺、ナンシー寺でのヤングーの儀礼でも、「さまざまな人間にうろつく悪霊を追い払う」ための宗教的動作であった。
- 10 柳の木は、民間の儀礼では、豊穡の水の神 特に龍に結び付けられるのが通例である。
- 11 チベット語 bcud とは、Jäschkeによると「essence, quintessence, invigorating cordial」つまり「精髓、素、元気付ける薬のようなもの」である。
- 12 チベットでは、母親はその家の穀物倉の管理者で、この蔵の鍵を肌身離さず身につけている。
- 13 ボン教のシーパに関しては、Per Kvaerne(1985,1997)に詳しい。
- 14 チベット語: gsur. この香は、粉状にした大麦と松柏の葉(シュクバ)を挽いたものを混ぜ、その上にバターを置いて焚く。焚く香には対象とする神々によって区別があるが、スルは、位の低い村共同体や家の神々へのものである。
- 15 二十八宿に関しては、『藏漢曆算学词典』(1985: 138-144)を参照。
- 16 Steinによれば、phyraは「天の神々」の意で、敦煌文献時代からすでに「託宣、卜占、幸運」の意でも

用いられていたという。この幸運の意のチャは、同じく幸運を意味するヤンと結合して用いられる(1957:12)。しかし、山口瑞鳳(1983)は、チャは、本来は古代チベットの部族名で、後にそれが神格化されて天にいる神々となったと歴史学的に考証している。この山口氏の解釈のほうが著者には妥当だと思われる。著者が手に入れたボン教の儀式書では、チャヤムなどの古代部族名が列挙されている箇所があり、また、チャ・ヤンという接続の『と』なしの形で用いられるときのチャは、「生命」の意味の含みを持つと考えられる。

- 17 次の章2.2.1の写真4を参照。
- 18 ニンマー派の学僧, Norbu (1995:73) を参照。
- 19 2003年12月である。
- 20 ム・シャー(又は、ム・シャック)といわれ、溶かしたバターに薬を混ぜ合わせたもので、大きな金属製の鉢に入れられた儀礼用供物。写真9を参照。
- 21 チベット語のタイトル: rNam par rgyal ba'i phyag-gyang dmu zhags 'khyil pa zhes bya ba bzhugs
- 22 このような白いフェルトは、結婚式のときにも使われ、花嫁が、花婿の家に着くと、この上に座るものでもある。
- 23 ヤンの綱に関しては、上述の(1.1.1.4の)Karmayの記述、およびStein(1957)を参照。天に昇る綱・ムの綱と対照をなす。
- 24 「ヤンを招くもの」とは、大麦、小麦、米、裸麦、豆、乾燥した花、羊毛、辛子の八つのもの、塩、茶、薬粒、白檀と施主の頭頂の毛、三つの白いもの(バター、ヨーグルト、チーズ)、三つの甘いもの(砂糖、蜂蜜、甘蔗)、施主の著者が購入した宝石、中国の硬貨、金片などを混ぜ合わせたもの。
- 25 山口(1983)の考証によると、ムは、チベットの古代部族名で、後天の神名になる。吐蕃王朝成立期、チャ族と婚姻を重ねた母方親族の代表的な存在の部族。
- 26 この掛け声(khu ye)は、ヤンやチャを呼ぶときのボン教独自の掛け声で、「引っかかれ、引っかかれ」のような意味が含有されているようだ。四川省・ナンシー寺で手に入れた儀式書には、この二字の宇宙論的な解釈が示されている。
- 27 このラマは、テンジン・ナムタク師。彼は、若き頃、イギリスのチベット学者,D. Snellgrove と共同で仕事をしたボン教の学僧。現在最も世界的に知られたボン教の僧の一人である。
- 28 この儀式書の全文の邦訳は、著者によって2009年3月に出版予定である。
- 29 チベット語: g-Yang 'bum dkar po las phyag mar mda'dar bstod pa bzhungs so
- 30 ダラは民間の共同体の祭儀では、人気のある神で、共同体を守るために戦う神とされる。通常は、dgra lhaとつづられるが、ボン教では、このスペルを用いる。
- 31 これらの神々は、「人世間の神々」と分類され、人々の現世利益にかかわるとされる。
- 32 ク・イエというヤンを呼ぶときの掛け声の宇宙的な意味の説明は、儀式書(51 a~51 b)に述べられている。
- 33 ヤクのメス。チベット人にとっては、ミルクを供給する貴重な家畜である。
- 34 ゾモは、ヤクのオスと牛のメス、あるいはオスの牛とメスのヤクの交配種で、ミルク牛として貴重な家畜。この女神の名前は、「ほら貝(のように)白い山(女性形)」の意
- 35 キ・キ・ソ・ソともいわれる。神に祈願するときの決まり文句。峠を越える人々は、峠の頂でよくルン・タ(風・馬)の切り紙を空にむけて投げ上げ、この文句を叫ぶ習俗がある。
- 36 心臓の形をした儀礼用のケーキ(トルマ: 'brang rgyas)。
- 37 Nam tshad lha sgo: 宇宙を象徴する五色の糸を張ったひし形の枠(ナムカ)を上部に付け、その下の長方形の板(位牌のような形)に文字や神の絵を描いた儀礼用具。この描かれた文字や絵が神の出入り

の門となる。全体が神の拠り所となる。ナムカについては、写真13を参照。



写真13 宇宙を象徴するナムカ

38 共同体の収穫後の祭祀に関しては、S. G. Karmay (2000:383-413) やS. Nagano (2000:567-609) を参照。

引用文献

(チベット文献—g-Yang 'gugs関連の儀礼書)

g-Yang 'bum dkar po las phyé mar mda' dar bstod pa bzhugs so (74 folios): 中国四川省阿壩県、ナンシー寺で2006年に入手。

rNam par rgyal ba'i phyá g-yang dmu zhags 'khyil pa zhes bya ba bzhugs (11folios): カトマンズ、ボン教の寺・ティテン・ノルブ・ツェ寺で2002年に入手。

gShen rab rnam par rgyal ba'i g-yang skyabs bzhugs (8folios): カトマンズ、ボン教の寺・ティテン・ノルブ・ツェ寺で2002年に入手。

Phya g-yang gi khu ye dang bkra shis chen mo zhes bya ba bzhugs (6folios): カトマンズ、ボン教の寺・ティテン・ノルブ・ツェ寺で、2002年に入手。

Mu ye pra phud phyá'i mthar thug bzhugs so : Samten G. Karmay (2002) *The Call of the Blue Cuckoo*: pp. 35-90のテキスト、Osaka : National Museum of Ethnology,.

rNam rgyal stong mchod sogs kyi lag len dwangs shel me long zhes bya ba bzhugs so: チベット自治区、ニエモ村で2001年入手。

(チベット文献以外の文献)

Brauen, M. 1982 Death Customs in Ladakh. *Kailash* 9 (4) : 319-332.

Corlin, C. 1980 The Symbolism of the House in rGyal -thang, *Tibetan Studies in honour of Hugh Richardson*, eds. by M. Aris and Aung San Suu Kyi, 87-92, Oxford: Aris & Phillips Central Asian Studies.

Das, S. C. 1893 The Marriage Customs of Tibet. *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, vol.LXII , Part III:8-33.

Day, Sophie. 1989 *Embodying Spirites: Village Oracles and Possession Ritual in Ladakh, North India*. Ph.D. dissertation. London School of Economics of Political Science.

Ekvall, R. B. 1939 *Cultural Relations on the Kansu-Tibetan Border*. University of Chicago in Anthropology [1943 蓮井一雄訳、『甘肅西藏辺境地帯の民族』東京、帝国書院]

Karmay, S. G. 1998 *The Arrow and the Spindle – Studies in History, Myths, Rituals and Beliefs in Tibet*. Kathmandu: Mandal Book Point,

2000 A Comparative Study of the *yul lha* Cult in Two Areas and its Cosmological Aspects. *New Horizons in Bon Studies*, eds. by S. G. Karmay and Y. Nagano: 383-413. Osaka: National Museum of Ethnology.

- 2002 *Call of the Blue Cuckoo – An Anthology of Nine Bonpo Texts on Myths and Rituals*, eds. by S. G. Karmay and Y. Nagano. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 河口慧海 1978 (1993) 『チベット旅行記 (三)』 東京、講談社 (学術文庫)
- Kvaerne, P. 1985 *Tibet Bon Religion*. Leiden: E.J.Brill.
- 1997 *Cards for the Dead. Religions of Tibet in Practice*: 494-498. ed. By D. S. Lopez, Jr., New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt.Ltd.
- Lessing, F. 1942 雍和宮 *Yung = Ho = Kung — An Iconography of the Lamaist Cathedral in Peking with Notes on Lamaist Mythology and Cult*. Stockholm: The Sino-Swedish Expedition, Publication 18
- 1951 *Calling the Soul: A Lamaist Ritual. Semitic and Oriental Studies*, II: 263-284.
- Nagano, S. 2000 *Sacrifice and lha pa in the glu rol festival of Reb-skong. New Horizons in Bon Studies*, eds. by S.G. Karmay and Y. Nagano: 567-649. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Norbu, N. 1995 *Drung, Deu and Bön- Narrations, symbolic languages and the Bon tradition in ancient Tibet*. Dharamsala : Library of Tibetan Works and Archives.
- Phylactou, M. 1989 *Household Organisation and Marriage in Ladakh, India Himalaya*. Ph. D. dissertation, London School of Economics and Political Science.
- Sangyay, T. 1983 *Tibetan Ritual for the Dead*. translated by Gavin Kilty, *Tibetan Medicine* 7:30-40.
- Skorupski, T. and Cech, K. 1984 *Major Tibetan Life Cycle Events-Birth and Marriage Ceremonies. Kailash* 11 (1/2):5-32.
- Snellgrove, D. 1980 *The Nine Ways of Bon*. Boulder, Prajñā.
- Stein, R. A. 1957 *Les K'iang des marches sino-tibétaines – exemple de continuité de la tradition. Extrait de l'Annuaire 1957-1958 de Ecole Pratique des Hautes Études, Section Sciences Religieuses*. Paris.: Imprimerie Nationale.
- 1993 山口瑞鳳・定方晟訳 『チベットの文化 (決定版)』 東京：岩波書店
- Tucci, G. 1970 *Religion of Tibet*. translated from German and Italian by G. Samuel. New Delhi: Allied Publishers Private Limited.
- 1980 *Tibetan Painted Scrolls*. Kyoto: Rinsen Book Co.
- 山口瑞鳳 1983 『吐蕃王国成立史研究』 東京、岩波書店
- 1991 「ボン教の成立と変遷」 国立民族学博物館監修 『季刊 民族学』 58 : 85-89.

(字典類)

- Jäschke, H. A. 1881 *Tibetan-English Dictionary (compact edition)*, Kyoto: Rinsen Book Company
- 張怡蘇 主編 1993 『藏漢大辭典』 北京、民族出版社
- 藏漢大詞典編寫組 1985 『藏漢曆算學詞典』 成都、四川民族出版社